

三岸節子〈短歌ポスト〉入選作品（二〇二四年後期分）

選者 小塩卓哉（現代歌人協会理事）

【優秀作】

月夜の縞馬

ひとりでも生きてはゆけるけどあの時ふたりは確かにしまうまでであった

長久手市 大学生 富山 桃仁花

三岸節子《月夜の縞馬》
1936年 ©MIGISHI

〈評〉絵に描かれた二頭のシマウマに、作者は自分と恋人とを重ねているのである。「ひとりでも生きてはゆけるけど」からすると、かつての恋人なのかもしれない。「あの時」はこの「月夜の縞馬」の絵を一緒に見た時か。過ぎ去った時間はもう戻らないが、この絵を見ればその時の二人の関係が一瞬にして蘇るのである。



自画像

それならば愛しておあげなおさらに口元に笑み浮かぶ日もあれ

稲沢市 安田 一子

三岸節子《自画像》
1925年 ©MIGISHI

〈評〉「自画像」を見る限り、口元に笑みは浮かんでいない。自己愛、自己肯定とは距離を置いて「自画像」だと作者は見ているのである。そんな節子の自己への距離感を、作者は、「それならば」という語で表現をしている。若い頃のそのような思いをよく理解した上で、きつと自分を許せるような日は来るのだよと作者は言っているのだろう。



土蔵の中のはにわ

迎えているはにわの笑みはそのまんま節子の笑みに似てはいまいか

東郷町 古川 匡子

左：盾を持つ埴輪
右：髻のある埴輪

〈評〉土蔵展示室に入ると、埴輪たちが待ち受けている。その顔は口を開け笑みが浮かんでいる。節子と埴輪の顔とが似ている訳ではないが、笑顔は万人に共通性がある。その奥が節子のアトリエとなっていて土蔵展示室の入り口のオブジェとして、笑顔の埴輪はいかにもそぐわしいと作者は思ったのだろう。「そのまんま」の語がユーモラスな感覚を一首に漂わせている。

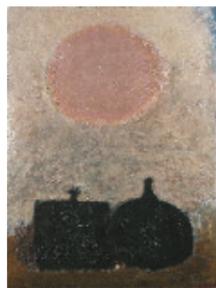


【佳作】

作品1

夕陽見てふたつの花びん並んでる人想うのはいつかの春か

津島市 荻野 里美



三岸節子《作品1》
1991年 ©MIGISHI

雲と海の対話（嵐）

静寂を壊さんとする黒雲に覚悟決めたる碧き海原

一宮市 中島 克己



三岸節子《雲と海の対話（嵐）》
1975年 ©MIGISHI

月夜の縞馬

ほんたうは縞などほしくない馬は月夜の海に帯をときたり

犬山市 有本 仁政



三岸節子《月夜の縞馬》
1936年 ©MIGISHI

三岸節子記念美術館

節子画に初めて接す秋の日に妻と歩める幸せ思ふ

刈谷市 鈴木 哲



一宮市三岸節子記念美術館

カーニユ風景

さまごまにかさなりあうよいえいえがそらもかさなるいろのかずかず

一宮市 神山小学校5年生 安場 つむぎ



三岸節子《カーニユ風景》
1969年 ©MIGISHI

馬

一匹の馬がうるおいもとめてるひとりぼっちでなみだもかれて

一宮市 葉栗北小学校4年生 森下 紗奈



三岸節子《馬》
1930年代 ©MIGISHI